



蜜へ

一步先のあなたへ

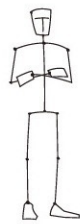
永田 和宏



22 もっとも輝いている自分に出会う

以前に「〈他者〉を知ることによって初めて〈自己〉というものへの意識が芽生える」と書いた(第十四回)。「私」という存在は、他者の視線のなかで、あるいは他者の視線を意識した時に初めて見えてくるものなのである。他者の視線のなかに自分を置くということは、すなわち自己の相対化に他ならない。しかし、その視線が気になるとき、視線の送り手たる〈他者〉は、その他大勢としての他者ではなく、自分にとって特別の存在であるにちがいない。〈他者〉から〈相手〉という存在に変わる瞬間である。〈他者〉という不特定多数ではなく、はっきりと自分と対峙する対象として〈相手〉を意識するとき、それに向かう存在としての自分を強く意識せざるを得ない。

相手の視線を受け止めて、その視線のなかに自分の位置を定めるためには、そもそも相手に関心がなければそれは成り立たない。相手が「気になる」存在だということである。そんな形で私たちは〈他者〉を自分のなかに取り込んでゆく。そんななかで、ある特定の〈相手〉の前に立つと、自分ももっとも輝いていると感ぜられることがあるとすれば、それはすなわち相手を愛しているということなのだろう。その相手のために輝いていたいと思うことが愛するということなのである。



そんな利己的な、と思うだろうか。愛とはもっと相手を思うことであり、深く理解することであり、かけがえない存在として大切にすることではないのかという反論が当然であろう。辞書的には、愛情とはそのようなものであり、極論すれば、自分を捨てても相手に尽くすという利他的なものである。自分の輝きを見つめるために相手を愛するというのは本末転倒だろうというのはその通りである。



しかし、そんな風に相手を深く理解し、自分より相手を大切にさえ思えること、それはそれまでになかった新しい体験に違いない。ああ自分はこんなにも相手を深く思うことができるのだ、という喜びを感じるとき、そう思える〈私〉は輝いている。輝いている自分をはっきり感じることができる。輝いていると感ぜられるのは、相手の前で、鑑わなくてもいい、生身の自分がさらけ出せると思えるときにしか実現しないものだ。こう見せたい、見て欲しいという計らいを捨て、ありのままの実寸大の自分でいられる、鑑わなくても自分のいちばんいい面が現れる、その前で話をする、自分の可能性がどんどん開けていく気がする、自分にはこんな側面があったのかと発見する、それらすべては愛情が後ろから押しているからこそ実現する自己発見である。これはたぶんなにも増して、実感を伴った成功体験である。どんな素晴らしい成功を収めても、どんな賞を獲得しても、どんな大会に優勝しても、心から喜んでくれる人がいなければなんの意味も持たないのと同じように、逆に、ほんのちょっとした自分の行為を心から褒めてくれる存在があるとき自分がそれまでの自分とは違った輝きに包まれているのを感じることができる。

私はこの文章を若い人を念頭において書いているが、せむしそんな一人に出会うことによつて、それ以前には自覚できていなかった「輝いている自分」に出会ってほしいと願っている。心から愛することのできる人を得ることは自分のもっとも美しい部分を発見することなのである。愛する人を失ったとき、失恋でも、死別でも、それが痛切な痛みとして堪えるのは愛の対象を失ったからだけではなく、その相手の前で輝いていた自分を失ったからなのもある。

四年前に私は妻を失った。彼女の前で自分がどんなに自然に無邪気に輝いていたかを、今ごろになって痛切に感じているのである。

四年前に私は妻を失った。彼女の前で自分がどんなに自然に無邪気に輝いていたかを、今ごろになって痛切に感じているのである。

京都産業大教授(細胞生物学)、歌人

※コラムへの感想をメールでお寄せください。minna@mb.kyoto-np.co.jp

相手の前で鑑わなくてもいい自分
心から愛せる存在が出現したとき
それまでと違った輝きに包まれる